保育者養成の諸問題

大戸美也子

保育者養成の実践上の課題は、幼児における変革を可能にする人に必要とされる資質要件をどのように描出するか、またそこに学ぶ者ひとりひとりが、主体的にその資質条件を満たしうる教育状況をどのように整えるか、ということにある。この課題解決の過程に成立するいくつかの問題点について論じてみよう。

1

保育者の資質条件は、どのような保育活動を展開しようとするか、すなわちどのような保育観をとるかにより異なるものとなる。現在いくつかの保育観が一般に認められ、採用されているが、そのどれにも幼児における変革を可能にするものが含まれ、変革を実現する保育者の資質が示されていると思われる。どの保育観によるどのような資質要件が大切かを問う前に、おのおのの保育観がまさに必要としている保育者の資質要件を知ることが大切ではないか。

幼児における変革は、幼児の内的世界の保障からはじまるという立場がある。幼児はそれ自体一個の独立した人間としての特質、しかも「非常に純度の高い」[注1]特質をもつ存在であるから、保育者は幼児にそなわった特質が展開されやすいように環境に働きかければよいとする立場である、このような保育観により展開される保育活動をひとつの保育状況としてとらえ、そこで保育者のあり方をその保育状況の展開に必要な資質の実現されたものとしてみると、次のようにとらえなおすことができる。幼児が主体的に自己変革をめざす保育活動においては、保育者は幼児との関係を内接的にになって「幼児との一体感」[注2]を深めたり「内的充実に積極的に参加する」ことが要請される、と解釈できるのである。

また、幼児における変革は幼児をとりまく外的世界の保障から

はじまるとする立場がある。幼児はその自己充実の発展も、まわりのものや人への関心の増大も、用意された物的、人的環境により左右される存在であるから、保育者は、幼児の変化、発達の方向を洞察して、保育施設、保育内容等の環境を整えなければならないとする立場である。すなわち、幼児における変革に保育者が主導的にかかわる保育活動においては、保育者は幼児との関係を外接的にになって、幼児および幼児をとりまく物的条件を客観的に洞察することが要請されるのである。

また、幼児における変革は幼児と幼児をつつむものとの関係の発展の保障からはじまるとする立場がある、幼児はおとなとの関係を離れては存在することのできない「関係的存在」[注3]であり、また幼児は幼児であるとともに成人する「未来志向的存在」であるから、今ここに展開する状況の発展をになうものは、幼児であり保育者であるとする立場である。すなわち、幼児における変革は幼児と保育者とその関係発展の結果であるとする保育活動においては、保育者は幼児との関係を接在的にになって、幼児・保育者が統合されて動く関係状況を理解することが要請されるのである。

保育観によって、展開される保育活動は異なり、要請される資質要件も異なる。しかし、それがひとつの典型的な保育状況を提供しているとみ、そこに要請される資質条件を、幼児における変革を可能にする保育のあり方のひとつとしてとらえるなら、どの保育観も、どの保育活動も、そしてどの資質条件も、保育活動というさまざまな教育状況を含む総合活動に位置づくことになるのである。

このような見方によって、幼児における主体的な自己関係の変革がめざされる場合には、「子どもといっしょにひたりきること」が重要であり、幼児が自分をとりまくものについて理解を深めようとする場合には、保育者は「外から適切に働きかけること」が大切であり、そして幼児と保育者との人間関係の発展がめざされる場合には、保育者は幼児との「関係の発展の契機をつかむ」ことに敏感でなければならないことが示された。

保育者養成校では、幼児における自己関係、もの関係、人関係の発展がもたされるような保育者のあり方について、さらに検討を深め具体的な教育内容に位置づけていかなければならない。「子どもとひたりきる」にはどのような活動を用意したらよいか。「子どもに適切に働きかける」にはどのような知識、技術が必要なのか。また「関係の発展の契機をつかむ」ために必要な理論と実践とはどんなものか、現在、第二の「子どもに適切に働きかける」ために要求される知識や技術の検討はすすんでいるが、残る二つについては十分研究されているとはいえない。ここに、保育者養成に関する第一の問題点がある。

「子どもとひたりきる」とか「関係の発展の契機をつかむ」という具体的な行為にふれてその内容が理解でき、それでいて日常生活の中でそうとは気づかれないままにたくさんの体験をふんで

いる事柄を、どう意識化し教育状況に再構成するか、非常にむずかしい問題である。

松村康平氏は、児童臨床者（児童臨床活動に参加して働き、児童における変革を可能とする人たち）の資質要件について、きわめて具体的な指摘をしているが、[注4] これは保育者の資質、ことに第三にあげた資質要件を考える上に非常に役立つものとなろう。

「児童臨床者は、児童との関係の発展に関する理論をもち、関係発展の技法を使え、児童における変革が実際にもたらされるように実践ができ、そのことに責任をもってあたれる人でなければならない。〈略〉児童と臨床者との関係の発展がもたらす児童の変革のための、児童臨床家の資質要件としては、次のものがある。

○豊富な関係体験
○多面的な関係認識
○鋭敏な関係洞察
○適正な関係操作
○関係責任の遂行　」

保育者の養成にあたるものは「一体感」の養成にも「適切な指導」の養成にも、ここに示されたような相互に有機的な関連をもつ養成課程を、本格的に検討していかなければならないのである。

2

保育者の資質条件が吟味され、相互に有機的な関連をもって示されたとしても、認識的に理解される機会しか与えられないのでは不十分である。ここに、保育者養成に関する第二の問題点がある。さまざまな資質要件は具体的な幼児との出会いの中で、幼児における自己関係、人関係、物関係の発展に役立つよう発揮されなければならない。そのためには、理論が実践を通して確認され、また具体的な実践の中で、新しい「理論」の創造が行なわれるような場が養成課程に用意される必要があるのである。養成校では、保育活動に関する理論を学び、教育実習で実践するという考えがあるが、理論に結びつかない実践、実践に結びつかない理論を学んでも「ある理論」と「ある実践」の二つの異なる事柄を学んだにすぎない。理論が具体的な形で示される実践の場、すなわち「臨床活動」[注5] の場が必要なのである。

「臨床活動」の特徴は、教師が臨床活動の発展する方向に関して主導的にかかわることがあっても、臨床活動の発展の過程に関して学生は主導的に参加することができ、このことによって、教師と学生とが臨床活動の発展に関して共通の基盤をもてることにある。教師と学生とが、活動の発展する状況を共有することは重要なことである。これから教師となって、諸活動の発展に主導的にかかわる人たちに、活動の発展に主導的に参加できる機会が多数用意されなければ養成の実をあげることができない。

保育者の養成にあたるものは、なんらかの方法で「臨床活動」ないし臨床活動の特質をそなえた場を確保していかなければなら

ない。たとえば、具体的に幼児との教育実践活動を教師と学生ですすめながら、教育実践を高める研究と養成が同時的に行なわれる機会が作られることが望ましい。しかし、教育即養成即研究を可能とする実践活動が展開できるためには、指導者が特別の理論と実践と技法を習得していることが前提となるし、学生数、場所の問題もあり、実現は必ずしも容易ではない。しかし、いくつかの実践[注6]に学んで、広めていかなければならないものである。

また、授業のすすめ方によっても臨床活動に類似する状況は作られる。教師が課題をなげかけ、それを小集団で受けとめる状況、小集団で受けとめたものを全体化する状況、全体化されたものを個別にとらえ直す状況……等、状況をさまざまに操作しながら、学生、教師が授業の発展に主導的にかかわれるようにすすめるのである。このような授業運営には、アクション・ソシオメトリー、バズ法、ロール・プレイイングや各種の集団運営の技法が役立つものとなる、

3

保育者養成校の教育目的や方法について十分吟味されたとしても、なお残る保育者養成に関する問題点がある。それは養成期間の問題である。

教師になる過程は、永続的な過程である。アメリカの幼児教育者、故ソーラ・ジルベスは、十代の終りから退職後さらに十年間も教育活動を続けた人であるが、教師としての成長は生涯にわたって行なわれることを次のように語っている。

「わたしは、多分生涯を教師としてささげた人間の見本だと思います。この長い変化に富んだ経験を通して、わたしは教師として成長するさまざまなあり方を見てきました。この年になっても、教師の仕事に新しい発展をもたらすような洞察や発見をすることがあります……」

保育者養成校は、これから教師になる人たちに、実践活動を展開するようになった時に役立つと思われる知識や技術を提供している。長い、教師になる課程の導入部を担当しているわけである。しかし「新しい洞察が得られるごとに新しい地平線があらわれ、教師として新しい努力をはじめるよう輝き出す」のである。教師になるというこの連続的過程に、保育者の養成、幼児教育の向上に努めている人々がどのようにかかわることができるか。ここに保育者養成を広くとらえての第三の問題を指摘できるのである。

最近、保育者養成校を中心に現職の先生方の各種研究会、現職教育研究会等が盛んになってきたことは、このような問題に答える一連の動きであるのかもしれない。今、教師である人、毎日しっかり子どもを見つめている人に成立する問題解決の中から、幼児の真の幸せが実現される活動の理論と技法があきらかにされていくのではないかと考えている

（郡山女子大学）

注　35ページ

友だちのしまい残しをそっといじりながら、完全ではないが、保育者の助けをかりてまじわり始めていったようだ。

以上今回は、くり返しくり返し遊ばれる、誰でもがする、遊び場での指先のあらわれ、表情を見つめてみた。

その中でも、さわろう、使おうとしての表情でなく、〝遊ぼうとしない、なんとなくさわった時のあらわれ〟をとらえ、そのあらわれを、保育者が受けとめ、助言したり、いっしょに参加したりしてみて、心の動きの変化をどのように指先が知らせてくれるかを、たしかめてみた。

絵本、ボール、ぬいぐるみ、ブロックなど、いつでも保育室にあるものに対する、無意識での参加、不安定なあらわれから、助言や、くり返しの回数によって自信をもち、力強いあらわれになることが、わずかであるがくみとれたようだ。

（大田区立蒲田幼稚園）

保育者養成の諸問題　〈注〉

1　柴谷久雄「幼児教育の原理」（幼児教育学全集1　小学館　一九七〇）

2　松村康平「子どものおもちゃと遊びの指導」（保育学講座7　フレーベル館　一九七〇）

3　松村康平「児童理解の方法」（誠信書房　一九五八）

4　松村康平「児童臨床者の資質要件」（石井哲夫編「児童臨床心理学」恒内出版　一九六九）

5　松村康平「児童臨床学」（お茶の水女子大学家政学講座2　光生館　一九六九）

6　お茶の水女子大学児童臨床研究室では松村康平氏の指導のもとに、教育、研究、養成を同時的に展開している幼児集団研究活動を行なっており、教育、研究、養成のそれぞれに成果をあげている。